

# St. Luke's International University Repository

## Development and Evaluation of Gerontological Nursing Program in Integrated Curriculum of Undergraduate Nursing Education.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 亀井, 智子, 久代, 和加子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10285/399">http://hdl.handle.net/10285/399</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 看護基礎教育統合型カリキュラムにおける 老年看護学教育体系の開発と形成的評価

亀井 智子<sup>1)</sup> 久代和加子<sup>2)</sup>

## 要 旨

看護基礎教育統合型カリキュラムにおいて学部教育におけるこれまでの老年看護学の教育内容を見直し、教育体系の開発および形成的評価を行った。1999年度に行った各教科目別の課題の明確化、看護基礎教育内容の検討、統合型カリキュラムにおける老年看護学の教育内容の位置づけについて検討したプロセスを示し、それに基づき2000年度に加えた講義内容、および新規開講科目についての評価を行った。その結果以下の知見が得られた。

1. これまでに老年看護学が担当した教科目の課題を検討するプロセスを通して、本学の統合型カリキュラム枠組みに照らして内容に不足があったことが示された。垂直軸（人間と環境の相互作用）と水平軸（高齢者の生活の場）において教育内容を表すことによって、統合型カリキュラムにおける老年期の看護教育内容を網羅することができる。
2. 老年看護学で教育すべき内容の中で、3年次前期までの必修科目において教育すべきものと、4年次前期の総合実習までに教育すべきものを見極めることが必要である。
3. 老年看護学が担当した教科目の形成的評価を通して、今後検討を要する課題としては、高齢者を取り巻く制度の変革と教育の時間的ギャップを少なくすること、学生が早期に高齢者に接する early exposure の機会をつくること、高齢者が生活する様々な場における看護を理解するために実習機関を拡大する必要があること、地域看護学部門との教育における連携の強化が必要であることがあげられた。

## キーワード

看護基礎教育、統合型カリキュラム、老年看護学教育、カリキュラム形成評価

## I. はじめに

本学が改訂カリキュラム（統合型カリキュラム）による看護教育を開始して5年が経過した。このカリキュラム開発の経緯は本学カリキュラム委員会からすでに報告されている<sup>1)</sup>。

また、1999年度に改訂カリキュラムによるはじめての卒業生を送り出し、本学ではさまざまな角度からカリキュラム評価を行うために、教員がグループを作り、すべての教員によってさまざまな観点からのカリキュラム評価に取り組まれている<sup>2) 3)</sup>。

一方、これらに先行して1990年に保健婦助産婦看護専門学校養成所指定規則が改正され、看護基礎教育カリキュ

ラム上、成人看護学から老人看護学が独立することになった。

1996年3月には看護職員の養成に関するカリキュラム等改善検討会中間報告が出され、在宅看護論および精神看護学の新設や、教科目による規定から教育内容による規定に変更され、統合カリキュラムによる運用について提言されている<sup>4) ~6)</sup>。

本学では、全体のカリキュラム枠組みは変更せずに、1999年度から従来の「成人・老人看護学」から「老人看護学」へと教育および研究部門を独立し、2000年度からは学則改正により老年看護学へと名称変更が行われたところである<sup>7)</sup>。

このことは、新たに本学の看護基礎教育カリキュラムの中に明確に老年看護学の教育および研究を位置づけ、社会の趨勢を踏まえて老年期における看護学を確立することが大学から期待されているものと考えられる。

1) 聖路加看護大学 助教授（老年看護学）

2) 聖路加看護大学 講師（老年看護学）

また、高齢者をとりまく保健医療福祉制度が急速に変化する中、臨床場面における高齢者への看護から、高齢者の生活の場を見据え、地域や在宅、施設など多様な場における高齢者と家族への看護をより一層強調して教育する必要性が高まっている。

そこで、老年看護学領域が独立したことに伴い、学部教育におけるこれまでの老年看護学の教育内容を見直し、1999年度に行った各教科目別の課題を明確化し、社会のニーズに照らして学部で行う教育内容に不足がないか、さらに統合型カリキュラムの枠組みの中で、老年看護学としてどのような教育内容を位置づけ、展開することが望ましいか検討を重ねた。

2000年度からは老年看護学の領域で教育内容を体系化し、新たな講義内容を加え、新規開講科目をおこし、その評価を行っている。

そこで、本論文ではTorres<sup>8)</sup>らのカリキュラム作成から評価までのプロセスを参考に、筆者らが老年看護学学部基礎教育体系を、検討した過程を示し、実際に教育を展開した評価の一部について述べる。

ここでは大学全体のカリキュラムとその部分である老年看護学教育体系の関係を、全体のカリキュラム過程でいう「方向づけ（理念、用語解、卒業生の特性など）」に従った「形成段階（カリキュラムデザイン、レベル目標、教科目標、内容配置図）」と「機能段階（内容アプローチ、教授方法と学習体験、学習の有効性の証明）」の一部分ととらえてそれを明確化することとした。「評価段階」では老年看護学のみの内容で構成された教科目については形成的評価を行い、複数の領域からなる教科目の評価については、老年看護学で担当した時間に限った形成的評価を行うことで、全体との関連性を検討した。

なお、実習（総合実習・老年看護）の展開と評価については昨年度報告しているため、ここでは講義科目についてのみ述べる。また、評価に関しては、学生の卒業後の特性を追って行うべきものまた、実習との関連など、学年の年次進行を待つことが必要な評価に関しては現状では行えないため、科目の形成的評価にとどめる。

老年看護学ゼミナールの科目評価に関しては、学生が行った科目評価のうち「科目全体への満足度」を分析に用いた。本論文における結果の公表については科目履修者9名の承諾を文書によって得た。

## II. 老年看護学教育体系の開発方法

本学の統合型カリキュラムの中で、学部教育における老年看護学の教育体系の開発は、大学のカリキュラムとの整合性を保ちながら、次のように行われた。

第1に、本学の学部教育において、改訂カリキュラム

の中で従来行われてきた成人・老人看護学の教育について、特に高齢者に焦点があてられて教授されている時間数および教育内容を教科目別に明確化し、教科目別の課題と可能な改善策を検討した。

第2に、課題をもとに、本学の看護学カリキュラムの主要概念である「人間」「健康」「環境」「看護」とその相互作用との整合性を図るため、垂直軸に「人間と環境の相互作用の回復・保護」「人間と環境の相互作用の修正」「人間と環境の相互作用の保持・強化」を、水平軸には高齢者の生活の場すなわち「治療の場」「療養の場」「家庭」を各々おいて、二次元の老年看護学学部教育体系マトリックスを作成した。

水平軸に“生活の場”をおいた理由は、高齢者の看護では対象者の健康とそれに影響する生活を見据えた援助が必要であり、また、看護の継続性、および高齢者への看護提供の場が医療機関から在宅へと近年転換され、在宅においても看護の質を保証することが認識されてきており、生活の場を移行する高齢者に必要な援助を考えられるよう、基礎教育にあたることが重要であると考えたためである。

第3に、作成したマトリックスに現行の統合型カリキュラムにおける教科目名をあてはめ、そこに課題として先に導かれた事柄を加味して、どの教科目で何を教育することが望ましいかを一教科目ごとに検討していった。

## III. 結果：カリキュラムのアセスメント、展開および評価

### 1. 教科目別の課題のアセスメント

1999年度の老人看護学に関する学部教育における科目別教育内容と課題の検討結果を表1に示した。

教科目別のさまざまな課題があげられたが、課題を総括すると、内容の重複および不足、他の教科目との時間的前後性、他の教科目との内容の兼ね合い、開講年次、時間数の配分、演習で分析のために提示する事例のテーマについて、選択科目についての課題、講義担当者、実習と講義時間の重なりによる教員の時間調整の問題などが明らかになった。

とりわけ、担当する講義時間の絶対的不足が共通してあげられた。前述した課題は講義時間を確保することで達成されるものが多いことが示された。

また、特に不足しているとされた教育内容は、高齢者のアセスメント、高齢者のターミナルケア、および高齢者に生じやすい骨折などいわゆる運動器系疾患の理解とケア、高齢者への援助技法（自立と依存、コミュニケーション等の演習）、介護保険など最近の高齢者の保健医療福祉制度、ケアマネジメント、アセスメントケアプラ

表1 1999年度に老人看護学が担当した学部教育科目別教育内容と課題および改善策の検討結果

学年	教科目名	担当時間数	講義内容	問題点・課題	改善策
N3	急性期看護論 I	2	症状と看護 脱水 症状、疾患の概論 薬物療法	<ul style="list-style-type: none"> <li>ポイントをどこにおおげよいか難しい</li> <li>生涯発達看護論 I とのかねあいが問題</li> <li>やりにくかった</li> <li>講義担当者を変えて欲しい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>老年期に重篤かつ頻度の高い急性状態にある高齢者のケア（循環器系/呼吸器系）にポイントをおく</li> </ul>
N3	急性期看護論 I 演習	8	せん妄事例提示 肺炎事例提示	<ul style="list-style-type: none"> <li>学生は楽しく演習していた</li> <li>急性期の高齢者への理解は深まった</li> <li>事例のテーマと何を学ばせるか課題</li> </ul>	—
N3	急性期看護論 II	2	術前後の老人の特徴	<ul style="list-style-type: none"> <li>老人の特徴と内容が他の科目と重複している</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>重複部分を省く</li> </ul>
N3	急性期看護論 II 演習	8	看護過程	<ul style="list-style-type: none"> <li>日程が総合実習の期間と重なり、教員の配置が大変である</li> <li>老人看護として看護過程に参加するか否か検討する必要がある</li> <li>TAをもっと活用したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>教員配置を工夫する</li> </ul>
N2	慢性期看護論 I	8	パーキンソン病 痴呆 ねたきり老人 家族への援助 老人体験	<ul style="list-style-type: none"> <li>講義する疾患を検討する</li> <li>コマ数の配分を再検討する</li> <li>老人の精神面について抜けている</li> <li>在宅で生活する高齢者の看護を加える必要がある</li> <li>どの教科目で学ぶか検討する（生涯発達論か？）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>老年期に頻度の高い慢性病と高齢者ケア（泌尿器系/運動器系/眼科/聴覚器系/精神系/神経系/歯口腔系）について触れる</li> <li>老人援助技法も含めて演習する</li> <li>生涯発達論の時間で行えるか検討する</li> </ul>
学士	生涯発達論 II	10	老年期とは 老化とは 老化の理論 老年期の社会的変化と発達課題 老年期の健康状態と病気の主な特徴 高齢者の生活とわが国の高齢化への変遷 高齢者と生活 保健医療福祉制度の変遷 老年期の身体・精神・心理機能の特徴 (アセスメント)	<ul style="list-style-type: none"> <li>フィジカルアセスメントにもっとウェイトを置く必要がある</li> <li>critical thinking: CTと学生の質問に時間をとられ過ぎた</li> <li>制度論は良かったという反応があった</li> <li>在宅のことを含めた講義は良かったという反応があった</li> <li>老人について講義時間がまとまっていて良いという反応があった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>CTに時間をとられ過ぎないように改善する</li> <li>高齢者のアセスメントの時間を増やす</li> </ul>
N1	生涯発達論 II	4	老年期とは 老化とは 老化と理論 老年期の社会的変化と発達課題 老年期の健康状態と病気の主な特徴 高齢者の生活とわが国の高齢化への変遷 高齢者と生活	<ul style="list-style-type: none"> <li>学士のクラス、および小見、成人の時間数に比較して老人の講義と時間数が少ない</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担当時間数を増やすよう検討する</li> </ul>
N1	生涯発達論 II 演習	4	3グループにわかれ、各時期の特徴を討議、発表（青年期・壮年期/中年期・老年期）	<ul style="list-style-type: none"> <li>この科目に老人体験演習を移動できないか</li> <li>この時間全てを老人の演習時間にあてられるか否かは科目担当者で検討する必要がある</li> </ul>	—
N2	生涯発達看護論 I	2	老年期のゆらぎ 老年期の病気の特徴 老年期の健康問題 老年期の発達課題 老年期のヘルスプロモーション 回想法 福祉機関について	<ul style="list-style-type: none"> <li>時間数が少ない</li> <li>家族について含める</li> <li>介護保険制度について入れて1コマ増やしたい</li> <li>研究を含めたものを紹介したい</li> <li>一人暮らし老人のことを触れる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日常生活とケア（老年期の特徴/日常生活特性/コミュニケーション/食事/排泄/衣類/住宅）について触れる</li> </ul>

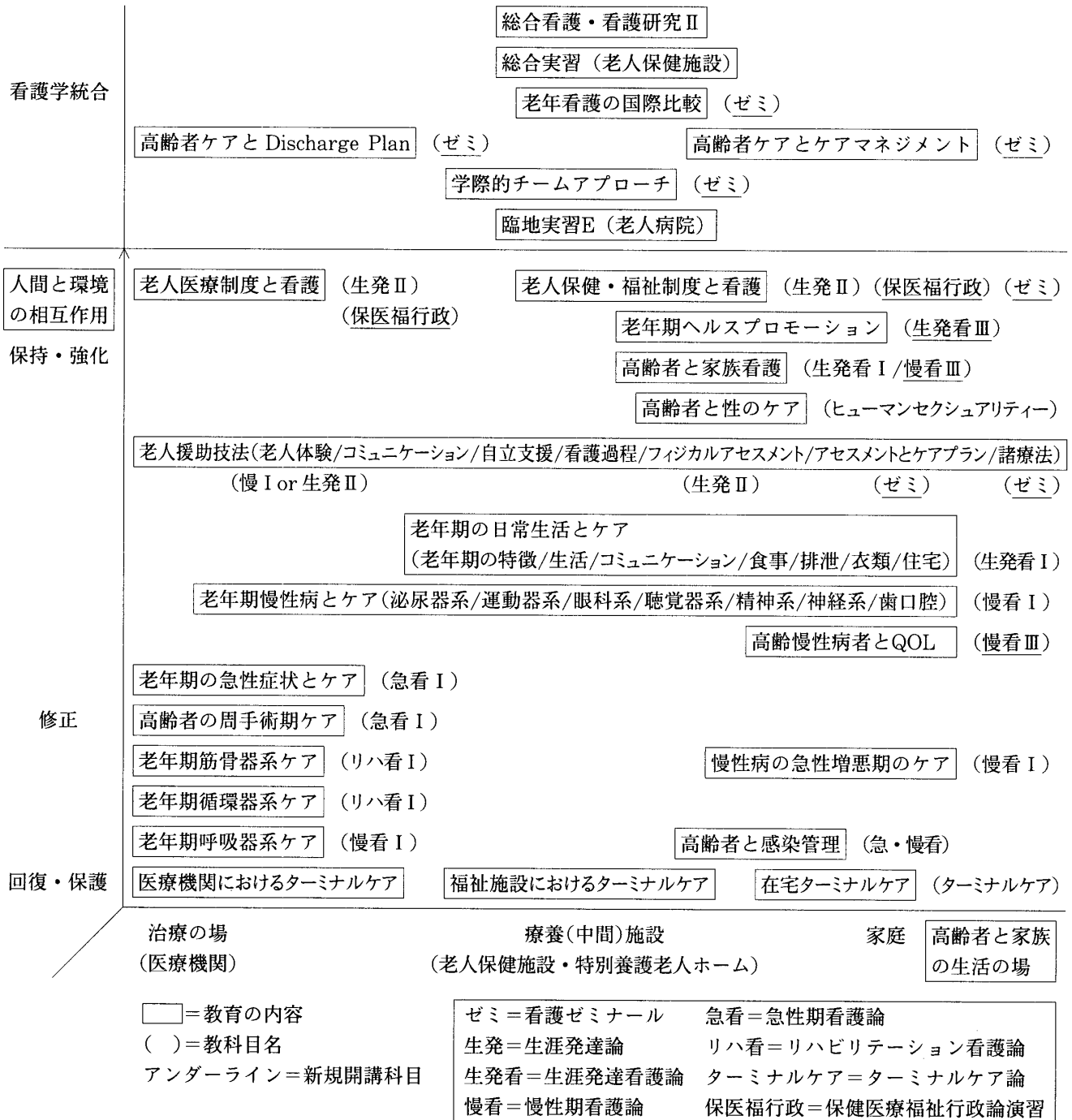


図1 2000年度老年看護学学部教育体系図

ン作成演習, 高齢者のセクシュアリティ, ならびに高齢者と家族看護についてであり, これらは早急に改善する必要があることが確認された。

## 2. 老年看護学学部教育マトリックスの作成

前述に従い作成されたマトリックスは図1に示した。

垂直軸に本学で開講されている教科目名をおくことは容易であったが, 水平軸をも同時に考慮して教科目をあてはめることは若干複雑であった。また, すでに開講されている教科目には該当しない内容が生じ, 新たに教科目を立てることを検討した。

これにより, 2000年度に計画された老年看護学に関する教育内容と担当時間数は表2に示した通りとなった。総担当時間数は177時間となり, 時間数の不足に起因する課題は大幅に改善された。

## 3. 主な教育科目の展開と評価

次に, 内容を変更した主な教育科目および2000年度に新規に開講した老年看護学関係の教育科目について, その展開と評価について示す。なお, 複数の教員で教育にあっている教科目については, 老年看護学で担当した時間および単位認定した教科目に限定して言及する。

表2 2000年度老年看護学が担当した教科目別担当時間数と主な教育内容

学 年	教 科 目 名	担当時間数	主 な 教 育 内 容
N 1	生涯発達論Ⅱ	8	老年期・加齢・老化とは 老化の理論 老年期の社会的変化と発達課題 老年期の健康状態と病気の特徴 わが国の高齢化の変遷 高齢者保健医療福祉制度の変遷 高齢者の身体・精神・心理機能のアセスメント
学士編入1年次	生涯発達論Ⅱ	10	老年期・加齢・老化とは 老化の理論 老年期の社会的変化と発達課題 ライフサイクルシミュレーション 老年期の健康状態と病気の特徴 わが国の高齢化の変遷 高齢者保健医療福祉制度の変遷 高齢者の身体・精神・心理機能のアセスメント
N 2 学士編入1年次	保健医療福祉制度論 演習	15	PBLによる学習(老人・母子の事例)
N 2 学士編入1年次	生涯発達看護論Ⅰ	4	老年期の健康問題と援助活動
N 3 学士編入2年次	急性期看護論Ⅰ 講義	4	健康状態の急激な変化と看護(症状と看護) 生命の危機状態にある高齢者・家族の看護
	演習	8	生命の危機状態にある人のケーススタディ 大腿骨頸部骨折とせん妄、高齢者の肺炎
N 3 学士編入2年次	急性期看護論Ⅱ 講義	2	対象にあわせた周手術期看護 手術を受ける高齢者と家族の看護
	演習	8	手術を受け健康状態が急激に変化する人のケーススタディ
N 2 学士編入2年次	慢性期看護論Ⅰ 講義	8	慢性病をもつ高齢者、家族の特徴 認知障害のある高齢者の看護 高齢者と家族看護
	演習	8	ケーススタディ(高齢慢性呼吸不全例の看護過程) 老人体験
N 3 学士編入2年次	ターミナルケア論 講義	2	高齢者の死に関する社会的背景 死生観と終末期にある高齢者の特徴と心の援助 痴呆高齢者の終末期の理解と援助
	演習	延べ10	文献購読と共有化グループワーク ターミナル事例を用いた事例検討
N 4	慢性期看護論Ⅲ(選)	30	慢性病者の生活の質の考え方、歴史 生活の質の測定と課題 慢性・長期的疾患をもつ者と家族の生活の質 学生が課題をみつけ文献収集、講読、発表、討議
N 4	生涯発達看護論Ⅲ (選)	30	高齢者のヘルスプロモーションを柱とした見学と討議 高齢者住宅(行政の高齢者住宅サービス)見学 ケアハウス見学 老人保健施設2ヶ所見学 特別養護老人ホーム見学
N 4	看護ゼミナール(選)	30	共通学習課題 痴呆性高齢者への回想法 高齢者ケアのチーム開発アプローチ 介護保険制度とケアマネジメント アセスメントケアプラン作成演習 選択学習課題(以下の中から1つ選択) 痴呆性高齢者への回想法の実際(見学) 高齢者とリアリティーオリエンテーション 高齢者と音楽療法 高齢者と discharge plan 高齢者の保健医療福祉制度と新ゴールドプラン 高齢者の在宅ケア・訪問看護制度 高齢者と社会保障制度 諸外国の高齢者ケア制度 家族・介護者に関する課題

1) 生涯発達論Ⅱ (学士編入1年次)

従来から開講され、学士編入生と学部生はクラスを分け、学士編入生には前期、学部1年生には後期に開講されている。

2000年度に老年看護学で担当した講義時間数は、10時間で、本教科目は老年看護学担当教員が単位認定者となった。

本教科目の老年看護担当部分の目標は、人の生涯発達の観点から老年期の発達課題、身体・心理・社会的特徴を理解することとした。

主な教育内容は、高齢者のイメージについてのブレインストーミング、老年期・加齢・老化についての定義、老化の理論、老年期の発達課題、高齢者の病気の特徴、高齢者と家族のライフサイクルシミュレーション、高齢者保健医療福祉制度の変遷、高齢者の身体・精神・心理機能のアセスメントと評価についてであり、講義および小グループディスカッション、VTRの供覧による学習を行った。

前期に履習した学士編入学生に老年期で担当した10時間(5コマ分)の感想を書いてもらったところ、「人生は厳しいと思った。でも(これからの人生が)楽しみ」「暗くなった」「人生はあまりにも短い」「自分の将来を見つめるよい機会になった」「さまざまなライフイベントが重なることがわかった」「両親に介護を尽くしたい」「高齢者に起こる問題は日常生活のあらゆる箇所から発生すると感じた」「これからの日本が抱える高齢社会の問題が浮き彫りにされ少し憂うつになった。欧米との違いがわかった」「看護の現場で前向きに取り組めるかが試されている気がした。どんどん看護の現場でできることをしていきたい」「4月からスタートしたばかりの介護保険制度について詳しく知ることができた。アセスメントシートも講義で使って非常にいい」「老人についてまとまった授業が受けられてよかった」「とても勉強になった。コマ数をもっと増やして」というものがあげられた。

2) 生涯発達看護論Ⅰ (学部2年次)

本教科目は、これまでも開講されており、今年度は老年看護学で、講義4時間を担当した。

講義内容は、老年期の健康問題と援助活動についてであり、目標は、老年期にある人々の健康状態の揺らぎや変化の特徴について、発達上の特徴や生活習慣・生活環境などの背景を踏まえて理解するとともに、健康問題を明らかにし、その人なりに健康で自立した日常生活が送れるような援助の方法について学習することとした。

授業中に高齢者のイメージについて聞いたところ、「旅行や趣味を持ち、時にはボランティア活動をするなど夫婦でのんびり暮らしている4割」「一人暮らしで好

きなことをして暮らしている3割」「家族形態は不明だがのんびり暮らしている2割」「子供の家族と同居してのんびり暮らしている1割」であり、老化の影響を受けた健康問題はほとんど出なかった。おそらく、学生は前期高齢者のイメージ化はできているが、老いや慢性疾患の影響をより強く受けている後期高齢者のイメージ化が難しかったようであり、今後の授業内容にも特に考慮すべきことと思われた。

3) 急性期看護論Ⅰ (学部3年次)

本教科目は、これまでも開講されており、老年看護学では講義4時間、演習8時間を担当した。

講義内容は、健康状態の急激な変化と看護(症状と看護)、および生命の危機状態にある人・家族の看護(急性の意識障害に陥った患者の看護)であった。

演習は、健康状態が急激に変化したり生命の危機状態にある老人のケースを通して対象の身体的・精神的・社会的特徴をとらえ、状況に合わせた看護を学習するというところで、「大腿骨頸部骨折とせん妄」「高齢者の肺炎」の2事例について複数のグループがシークエンス・オブ・イベント(関連図)やロールプレイなどを含む課題を学習し、小児と合同の発表の機会をもった。

演習後の感想には、「グループでよく話し合い、せん妄や高齢者の肺炎についての知識が深まった」「ケアの方向性、心の状態の捉え方について今までの知識と合わせ考えを深められた」「シークエンス・オブ・イベントは全体を捉えやすく理解の助けになり自分自身の勉強になった」「ロールプレイは自分がナースになった時、どう対応するのがよいかをイメージしたり、患者の気持ちを理解するのにとてもよかった」「家族も高齢者であることを考慮に入れて全体を見ることができた」と自分たちの取り組んだ事例に対しては、理解が深まったものの、「他の事例については発表を見ただけではまだよく分からないことが多いので、後で資料をよく読みたい」とあった。高齢者の事例を学習しなかった学生が、資料を見て発表を聞くだけでどこまで課題が深められたか不明であり、検討の余地がある。

4) 急性期看護論Ⅱ (学部3年次)

急性期看護論Ⅰと同様に、これまでも開講されていた教科目である。今年度は老年看護学で講義2時間、演習8時間担当をした。

講義内容は、手術を受ける高齢者とその家族の看護についてであった。

演習内容は、手術を受け健康状態が急激に変化する人のケーススタディを行った。

他領域の教員との協働であり、達成目標も老年期に限定してはいなかったが、分析事例が69歳の高齢者であったことから、担当グループに対しては老年期の特徴につ

いての示唆を十分に提供できた。

#### 5) ターミナルケア論 (学部3年次)

本教科目はこれまでも開講されていたが、2000年度から老年期にある人とターミナルケアについての講義時間を設けていただいた。老年看護学で担当した時間数は、講義2時間、演習延べ10時間であった。

講義内容は、高齢者の死に関する社会背景、死生観と終末期にある高齢者の特徴と心の援助、痴呆高齢者の終末期の理解と援助についてであった。演習では、学生が文献講読したことに関するグループワーク、事例分析に加わったが、これらは特に老年期のターミナルケアに限定した内容の演習ではなかった。

#### 6) 慢性期看護論Ⅲ (学部4年次)

本教科目は2000年度から新規開講した演習1単位の選択科目であり、今年度は老年看護学担当教員が単位認定を行った。

本教科は慢性・長期的な疾病をもつ者と家族の生活の質 (Quality of Life) に焦点をあて、学生が興味をもっている対象者群におけるQOLを考え、それを向上する看護の方法を探究することをねらいとし、他に、小児・成人・精神看護学の教員が加わった。

はじめにQOLの定義、QOL研究の動向、QOL測定をめぐる問題について講義を行った。その後は学生のテーマを聞きながらグループをつくり、そのグループごとに文献検索を行い、個別に主な文献を講読し、内容を要約し、資料にまとめ、発表の時間を設け、学びを共有するという学習の形式をとった。

7名が履習したが、そのテーマは「ターミナルケアとQOL」「糖尿病患者とQOL」「病気のこども・家族・きょうだいとQOL」の3つに集約され、2000年度は高齢者のQOLを探究する者はなかった。

履習者は文献検索により広範囲に論文を収集し、多くの研究や論説に触れ、QOLという複雑な課題に関して多角的な観点から考えをまとめ、発表によって他の学生、教員と同じ土俵でディスカッションでき、慢性病者のQOLを考えた看護について深く考えていた。

後に明らかになったことであるが、本教科目を選択した学生は、QOLというテーマに引かれ、講読した文献に興味をもち、総合看護・看護研究Ⅱ (卒業論文) でも継続して課題を追求していた。

#### 7) 生涯発達看護論Ⅲ (学部4年次)

今年度より開講した演習1単位の選択科目である。3名の学部学生が履修した。単位認定は老年看護学担当教員が行った。

老年期における健康の意味およびヘルスプロモーション活動の実際を知ることによって、老年期の人々と家族の思い、支援する側の思いについて理解を深めることを

目標とした。

方法として、台東区の高齢者住宅、ケアハウス、老人保健施設、特別養護老人ホーム、および杉並区の老人保健施設を見学し、利用者、家族およびその施設で働くスタッフの方々にインタビューを行った。

学生は、「とにかく忙しすぎた」「楽しかった」という感想とともに、「地域で暮らす高齢者がどのような経緯で施設を利用し、スタッフがどのように高齢者の生活を支援していくのか学ぶことができた」。また「生活感や季節感、設備の工夫も見ることができたことで、高齢者が安心して生き生きと生活するためには環境づくりへの配慮が大切であることがよくわかった」と述べていた。

#### 8) 老年看護ゼミナール (学部4年次)

看護学統合に位置づけられている本教科目は2000年度に新規開講し、演習1単位選択科目として4年次に行った。

本教科目をおいた理由は、本学の統合型カリキュラムの枠の中ではある特定の領域のみを掘り下げて扱うことには限界があり、近年急速に高齢者を取り巻く社会制度や環境が変化しているため、高齢者ケアの最近のトピックス・ケアマネジメント、ケアチームの作り方などについてを学部基礎教育においても教育する必要があることが前年度の評価から明確化したためである。また、生活の場を見据えて、高齢者の在宅や施設におけるケアに関する教育内容を老年看護学でも確立する必要性を考えたためである。2000年度は9名が履習した。

教育のねらいは、老年期にある人および家族への看護援助を多角的に考え、利用者の立場で体験的に学習し、具体的技法を理解することとした。

教育内容は、全員必須の共通学習課題と選択学習課題を設け、共通学習課題としては、痴呆性高齢者への回想法、高齢者ケアとチーム開発アプローチおよび介護保険制度とケアマネジメント (アセスメントとケアプラン演習) をおいた。

選択学習課題については現在の高齢者ケアで用いられている内容から学生の興味にもとづき、回想法の展開方法、保健医療福祉制度と新ゴールドプラン、高齢者の在宅ケアおよび訪問看護制度、家族や介護者に関する課題などいくつかの課題の中から主体的に選択して調べ、発表して共有するものとした。

学生の感想文には、「老いをキーワードにいろいろなことを多方面から学べた」「ゼミ形式は初めてでしたが、自分の興味のある領域を自分で調べていくというのはおもしろかった」「参加型の授業は窮屈さがなく伸び伸び学べた」「回想法の見学は全員で行きたかった」「介護保険制度について詳しく知れ、ケアプラン作成の流れやケアマネージャーの苦労がわかった」「演習が充実してい



た」「コンピュータを使っただけの演習は少人数クラスなら  
では、経験できてよかった」「初めに行ったチャレン  
ジプログラムは他の科目で行っているリーダーシップ論  
にも通じ、チームで、組織として一つの目標をもって取  
り組むということを感じてきた」等があげられた。

学生による教科目評価をみると9名の履習者中6名  
(回収率66.7%)の提出があり、10段階評価による満足  
度は8～10に分布し、平均8.7であった。

## IV. 考 察

### 1. 統合型カリキュラムにおける老年看護学学部教育体 系の開発経過について

筆者らは1999年度を境に老年看護学として独立して学  
部基礎教育を行う中で、1年間かけてさまざまな課題に  
対する改善策を探ってきた。

大学では、看護基礎教育カリキュラムの評価を全教員  
により行い、課題を抽出し、改善策を現在検討中である  
が、筆者らは大学全体のカリキュラム改善を待たずに可  
能なところから改善を図るという発想で取り組んできた。

したがって、本学の現行カリキュラムの枠組みとの整  
合性を保ちながら、なおかつ従来の教科目展開では不足・  
重複のあった内容を明確にした上で改善するというプロ  
セスをとった。

このプロセスを通して明確化したことは、例えば「老  
年期にある者と環境の相互作用の保持・強化」や「看護  
学統合」に位置づいた老年期に関する講義内容がなく、  
本学の枠組みに照らして内容の不足があったことである。  
図1に示したような垂直軸と水平軸において教育内容を  
表すことによって、すでにある統合型カリキュラムにお  
いて明確に老年期の看護を位置づけ、必要な教育内容を  
網羅することが可能になるといえ、これらのプロセスは  
妥当な方法であったと考える。

しかし、このカリキュラムで学んだ卒業生が卒業後ど  
のように活躍していくか長期的成果を評価する視点<sup>9)</sup>  
をもって評価することが必要であると考えられる。

### 2. 看護学統合へ向けた老年看護学教育体系の展開上の 限界

2000年度は計177時間の講義時間をもつことができ、  
総時間数としては前年度の3.5倍を得たため、前年度に  
比較すると、全体としては学部の学生に教育すべき内容  
を伝えることは可能となった。

ところが、このうち選択科目に位置づいている時間数  
が約2分の1を占め、3年次前期までに履修する必修科  
目については演習を含めて47時間分増えたが、このうち  
保健医療福祉行政論演習30時間を除くと17時間増に留まっ

ている。

この点については、各教科目での老年看護学の学びが  
3年次後期の臨地実習の目標と乖離しないことが重要で  
あると考えるが、老年看護学で教育したい内容の中で、  
3年次前期までの必修科目において教育すべきものと、  
4年次前期の総合実習までに教育すべきものを見極める  
ことが必要であると考えられる。

総合実習において老年看護学を選択する者は必ずしも慢  
性期看護論Ⅲや生涯発達看護論Ⅲ、老年看護学ゼミナ  
ールを選択しているとは限らないので、講義科目と実習科  
目の実質的な統合化は図ることができている学生はごく  
一部であると考えられる。したがって、3年次の臨地実習を  
もって老年看護学の学びを統合する学生が多いため、こ  
の点をよく考慮して必修科目の中に盛り込むべき内容を  
さらに検討することが必要であると考えられる。

### 3. 教科目別の評価と課題

老年看護学でも複数の教科目にわたり講義および演習  
を担当したが、評価については担当した講義部分につい  
ての形成的評価に留まる教科目が多い。卒業試験や外部  
評価のシステムはないため、本学で老年看護学について学  
生がいかに理解したかについてを総括的に評価すること  
は困難である。ここでは担当教科目についての形成的評  
価について、藤岡<sup>10)</sup>のカリキュラム評価の知的側面、  
社会的側面、個人的側面を参考に考察する。

生涯発達論Ⅱでは、老年期についてさまざまな側面か  
ら理解が得られ、目標は到達できたと考えた。しかし、  
高齢者のヘルスフィジカルアセスメントの実践演習につ  
いては盛り込むことができないため、VTRなどの教材  
をさらに精選することと、他の教科目との連携が必要で  
あると考える。なお、学部2年生への講義は今年度後期  
開講であるので、時間数を2倍に変更したことに関する  
評価は別の機会に述べる。

生涯発達看護論Ⅰは、実際に高齢者と共に生活してい  
る学生が少なく、老化することの実感がもてないのでは  
ないかと思われた。それゆえ、次年度にはこのことを強  
化した授業を展開するべきかもしれないと考える。

急性期看護論の演習では、高齢者に特徴とされる症状  
の理解や看護の視点、家族への援助の大切さについて、  
概ね学習できたと思われる。しかし、高齢者の事例分析  
をしなかった学生が、資料を見て発表を聞くだけでど  
こまで課題が深められたか不明である。

ターミナルケア論は講義時間を設けたことはよいと考  
えられたが、演習において高齢者のターミナル事例につ  
いて分析することが可能か、検討することが必要である。

慢性期看護論Ⅲは、QOLをキーワードとして多様な  
事例群における望ましい姿へのケアを考えることにつな

がり、結果として、学生はこれまでの学習に文献学習を加え、教員も学生と同じ視点で討論でき、コミュニケーションが深まり、看護学を統合する方向に学習がまとまっていったと考えられた。本教科目は人間と環境の保持・強化群に位置づいているが、本教科目の履修を通して看護を学問として統合する方向に学生には理解されたものと考えられる。

生涯発達看護論Ⅲは、見学する施設を選択し、ディスカッションの時間を増やし、じっくり取り組めるようにしたいと思っている。

老年看護ゼミナールでは高齢者ケアの最近のトピックスについて学生の積極的参加により活発に学ぶことができ、演習、体験学習、発表など講義形式を工夫し、多角的に学習でき、目標にも到達したと考えられた。

また、興味深いのは他の教科との統合がはかられた学生があり、看護学統合の位置づけに合致した授業構成であったと評価できる。

2000年度の老年看護学学部教育体系について述べたが、これらの教育の成果が実習にどのように反映されるのかについては学年進行した来年度以降の臨地実習時に明確化されると思われる。ひとつ問題であるのは、現在の臨地実習受入れ機関である老人病院は長期入院中の高齢者の看護を学ぶことが中心となっており、多様化している高齢者の看護提供機関の中の一部で学ぶに留まっている感があるため、地域の高齢者ケア機関なども視野に入れ、実習場の確保が待たれるところである。そのためには部門を越えた学内の教育における連携が重要であると考えられる。

## V. 今後の課題

2000年度には老年看護学では、講義時間数や教育内容を見直し、様々な工夫を取り入れてその独自性を学生に伝えようとした。

しかし、以下の点を課題として今後さらに検討することが必要であると考えられる。

- 高齢者を取り巻く制度の変革と教育の時間的ギャップをいかに少なくするか検討すること。
- 学生が早期に高齢者に接する early exposure の機会をつくり、そのために必要なまとまった演習時間を確保すること。
- 4年次に学ぶ教科目は選択科目が多いため、履修者のみに老年看護の教育体系が関連づけられ、それ以外

の学生には臨地実習をもって老年看護が統合される懸念がある。この点についてさらに検討することが必要である。

- 高齢者が生活するさまざまな場における看護を理解するために実習機関を拡大する必要がある。
- 地域看護学部門との教育における連携の強化が必要である。

## 引用文献

- 1) 菱沼典子, 小山真理子, 小島操子他: 聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて, 聖路加看護大学紀要, 22, 113-121, 1996.
- 2) 聖路加看護大学教員研修会資料, 1999年3月.
- 3) 聖路加看護大学カリキュラム評価会資料, 2000年9月.
- 4) 「看護教育」編集室編: 新カリキュラムの改正のポイント, 2-12, 医学書院, 1996.
- 5) 金子道子: 看護基礎教育における教育カリキュラムと「看護学大系」, 日本看護協会出版会, 1-4, 1998.
- 6) 看護問題研究会監: 新訂看護教育カリキュラム-21世紀を担う看護職員の資質の向上に向けて-, 第一法規, 1997.
- 7) 2000年度聖路加看護大学学則, 2000年度入学生学生便覧.
- 8) Torres, G., Stanton, M., 近藤潤子, 小山真理子訳: 看護教育カリキュラムその作成過程, 医学書院, 1988.
- 9) Moyra, Allen., 草刈淳子, 伊藤幸子訳: 看護教育プログラムの評価, 日本看護協会出版会, 1982.
- 10) 藤岡完治, 「看護教育」編集室編: 序, 新カリキュラム評価の視点と方法, 医学書院, 1-4, 1996.

## 参考文献

- B. S. Bloom, 梶田毅一ほか訳: 教育評価ハンドブック, 第一法規, 1977.
- 菱沼典子, 小山真理子, 小島操子他: 聖路加看護大学1995年度改訂カリキュラムについて, 聖路加看護大学紀要, 22, 113-121, 1996.
- 田島桂子: 看護教育評価の基礎と実際, 医学書院, 1989.
- 全国看護教育研究会監修, 看護学の教授・学習計画と展開, 医学書院, 1989.

---

Abstract

---

## Development and Evaluation of Gerontological Nursing Program in Integrated Curriculum of Undergraduate Nursing Education

Tomoko Kamei, R.N., Ph.D.<sup>1)</sup>, Wakako Kushiro, R.N.<sup>1)</sup>

We developed and evaluated of our undergraduate program of gerontological nursing in the integrated curriculum of undergraduate nursing education. The review process was described: identification of goal in each subject, review of undergraduate nursing educational programs, and a significance of gerontological nursing program in the integrated curriculum in the fiscal year of 1999. Based on these results, we evaluated additional and newly started programs in the fiscal year of 2000. The following findings were obtained:

1. Through the review process of the subject goals in gerontological nursing, the contents were not sufficient according to the framework of the integrated curriculum at St. Luke's College of Nursing. A scope of nursing for the elderly can be covered as much as possible by describing educational contents on the vertical line (interaction between human being and environment) and the horizontal line (living place for the elderly).
2. It is necessary to ascertain what programs in gerontological nursing should be taught by the first semester of the junior in compulsory subjects and by the first semester of the senior in comprehensive practice.
3. Our future challenges, which are revealed through the formative evaluation of gerontological nursing subjects, are to reduce a time gap between change of the health and welfare system for the elderly and education, to give students an opportunity of early exposure to the elderly, necessity of a network expansion with practice institutions for better understanding of nursing in the elderly living environment, and necessity of closer collaboration with community nursing in education.

**Key words**

undergraduate nursing education, integrated curriculum, gerontological nursing education, formative evaluation

---

1) St. Luke's College of Nursing, Gerontological Nursing